

## G. Greene における「参加 (アンガージュマン)」の問題(I)

——小説 The Comedians を中心として——

新 井 章 慶

### 〔序言〕

I looked at the fold of paper in my hand. I recognized the name written there. It was that of an officer in the Tontons Macoute. I said, *'I wonder if we ought to involve ourselves any further'*.

*'We are involved', mr Smith said with pride*, and I knew that he was thinking in the big terms I could not recognize, like Mankind, Justice, the Pursuit of Happiness. It was not for nothing that he had been a presidential candidate. (イタリック体は筆者以下おなじ)

船中でたまたま知り合ったジョーンズがハイチ官憲に監禁されたと聞いて、スミス氏は早速『私』を連れて、その難を救いに出かける。そして拘置所で面会したジョーンズの手渡す紙切れを見て『私』は、これは面倒なことになりそうだと逃げ腰になる。その『私』とスミス氏の交わすこの対話の一片は、この長篇小説“*The Comedians*”の性格を大まかに映しだしていると言ってよい。秘密警察トントズ・マクトが暴虐をふるう独裁国ハイチという大きな「悪」の存在（これは少なくとも1963年までのハイチの実情であると作者は言っている）そして、それに対する二つの人間の生きかたが、夜と雷鳴と死の暗い不協和音のなかで、対位法的に入り組み、もつれ合いながら進行していく。

そして、この闘争と退嬰のシンホニーは、人生の喜劇役者コメディアンたちの自己崩壊というエピローグで静かに終りを告げる。『私』はコメディアンの典型である。「人生は喜劇である。我々は、すべてこんな船に乗って、ある権力的な悪ふざけの冗談屋の手に押し流され、（死という）喜劇の終点に辿りつくのみである」これが『私』の哲学である。したがって『私』は他人の問題なんかに首を突っこんで苦しむのはバカバカシイことだと思う。

引用の“involved”という観念は、グリーン的主要作品では、早く“The Power and Glory”以来、陰に陽に現われ、グリーン文学の一極をなしていると言ってよい。それらの作品では、この involvement 意識が主人公たちの固執観念となって、彼らにとり憑いていた。そして彼らは意識的であれ、なかれ、この言葉の意味の根源にまで逆のぼり、迷い、苦しむ。あるいは「生」の神秘的存在にまで突き当たった。ところが、今度の新作では、主人公の『私』は、決して、そのような観念に憑かれた人ではないのである。豪華なホテルを経営し、酒場を設け、享楽の騒音にかこまれ、ひとつの愛撫する肉体を持つということ。ただ、これだけが生涯の夢である『私』にとって、“何らかの主義や主張のために献身する人たちは尊敬はできても、自分らにはとても、そのような勇気もなければ情熱もない。地球の日ごとの運行のまにまに、樹や石ころと同様、転々と生きていくだけである。”このように、作品の主人公が、はじめから固執観念から免疫であり、あるとすれば愛欲にまつわる悩みだけが、本能的に一時彼をさいなむ。そのような至極ありきたりの、ぬるま湯的人間が主役をするということは、グリーン的主要作品では、今度がはじめてであると言っている。そして、また、そのような主人公『私』の目を通して、『私』とまったく違った世界に生きる人々の行為とコトバが語られていく。だから凡てが即物的な客観描写で終始している。そのためか、ある意味では、前作品群にひしめいていた、グリーン独自のあの押えた筆致の奥から噴き出る、緊迫した意味の衝激力とか深い生のたぎりが、この作品では見られない。しかし、そのためにこの作品が失敗であるか、どうかの断定はシバク保留したい。とにかく、この作品は今までになく筋書きがきわめて明快である。従来のように、一人の人間の中に矛盾し葛藤する心理のコンプレックスがなく、それぞれの人物

が、それぞれの決定された路線を動いて行くからであろう。すなはち、『私』は、自分の利益にならないことには徹底して傍観者である。『私』は、フェラー（A Quiet American）のように“dégagé”と“engagé”の間を不安にゆれ動くようなことは決してない。一方、『私』と対置された人々は、同胞たちの自由と幸福への意志につき動かされて、あえて問題のなかに飛びこみ、苦を全身に荷なっていく。involvement を回避する者と、それを引き受ける者と、この二つの主題は、平行して、ついに交わることがない。作者のねらいは、一体どこにあるのだろうか。只現実をあるまじく描いたのであるのか。もし、そうだとしたら、これはグリーンの大転換である。しかし、筆者はそうように取ることが出来ない。involvement は（他人の問題に）巻きこまれることであるが、それが積極的な意味をもってくると、あえて自ら巻きこまれることになる。すなはち、現実への参加 アンガージュマンである。作者グリーンが、この作品以前まで一貫して主人公に自己投入して追い求めてきたアンガージュマンの精神は、今やこの小説に至って、一個の、人生の現象にすぎなくなったのであろうか。

この事が、筆者の明らかにしたいことの一つであるが、結論を先に言えば、けっきょく、作者は、『私』の中に潜む虚無感をえぐり出すことによって、逆説的にアンガージュマンの重要さを問うているのではないか。すなはち、『私』をふくめるコメディアン達が、この小説の主役ではあっても、それは、彼らのうしろで苦悶する人間たちの悲劇の真実さをクローズ・アップするための前景となるにすぎないのではないか。たとえば、独裁者の忌諱にふれて自殺に追いこまれたフィリポットの死体のそばで、『私』と女は、情事の忘我にふけるところがある。そのとき、『私』は、ふと「自分たちは、より深刻な生のドラマを呈示するために、薄彫り細工の協役をやっているにすぎないのだ」と自嘲している。この小説の対旋律の一つをなすコメディアンたちが頹落的かつ、かん高い響きを立て、もう一つの低い短調旋律を圧倒しがちな、この小説の構成ではあるが、この二つの織りなす音が呼びおこす主題は、明らかに積極的 involvement すなはちアンガージュマンの問題である。

こう見ると、グリーンの主要作品群を形成してきた「極」のひとつは此処に

おいても、また不変であることが分る。だが、この作品では、今までにない一つの新しい局面が展開されている。我々はこのことに注目したい。すなはち、前作品までは、主人公たちの心を動かした、他人の不幸へのするどい反応は、つねに対個人的行動の振幅を出なかった。ところがこの作品において、はじめて、**involvement** 精神は対個人的から対社会的、対政治的なものへと発展しているのである。この黒人共和国では、大臣は公然とワイロを要求し、政治が腐敗をきわめる、乞食やかたわが、街のいたるところに、“まるで梅雨どきの水のように割れ目という割れ目からにじみ出ている。”そして政府を批判する者の頭上には、カタッパンから秘密警察の暴力が打ちおろされる。貧富の差のはなはだしい、この悪しき社会状況が、今度の小説ではそっくりアンガージュマンの対象となっているのである。そして、最後の章にきて、亡命司祭の説教と、マルキスト **Magiot** の遺書が「そのような悪にたいしては、暴力をもってでも対決することが大切である」と強調する。このようなプロットの設定は、過去のグリーンには無かったことである。これは、確かに小説家グリーンの新しい実験である。

だが、問題がもう一つある。すなはち、これがグリーンの新しい実験のすべてであろうか、ということである。言いかえれば、グリーンは、従来の迷路のような暗喩的手法や、白・黒の判断を拒否する人間行為の多義性をかなぐりすて、単純明快の境地に到達したのであるかということである。自分にはどうもそう思えないのである。グリーンの、「あいまいさ」ともとれる多義性は、彼の手のこんだプロットからと云うよりは、むしろ作家の本質に由来するものであったと思う。それは、グリーンが、人間の生への鋭い洞察力から生じたのである。人間そのものが本来、多義的存在なのである。それへの作家の視力が鈍らないかぎり、グリーンが多義性が失なわれるはずがない。だから、今度の新しい作品の明快さは、外見上のことにすぎないように思われるのである。もちろん、主題はアンガージュマンの問題であり、アンガージェセよということである。だが、それだけかと、言いたいのである。それに尽くされない「何ものか」が隠されているような気がする。その「何ものか」にグリーンがねらいを見るときたら、この作品は、今までの作品に劣らず厄介だ。それは、作家

の徹底した相対的現実認識と、「絶対」そのものへの鋭敏な感受力という、二つの相反する資質が、調和を目ざして相剋する「あいまいさ」なのである。その「あいまいさ」が、この小説にも感ぜられるのである。

以上、この小説が、コミディアン的快楽主義者と現実改革者の行動を対比させながら、アンガージュマンの精神を主張しているということ。ところが、その意味のニュアンスが意外に端尻をゆるさないということ。この事について、手っとり早くテキストに即して分析し、推論してみたいと思う。引用が長くなるが、特に最後の章は考慮すべき問題点をはらんでいるから、部分的にカットしながら挙げたいと思う。

### 〔Ⅰ〕

まず、場面は小フィリポットのひきいる反政府ゲリラ隊が敗北を喫し、血まみれになって隣接国ドミニカに逃亡してきたところである。そこで、カトリック信者をふくむ四人の戦死者のために、同じような亡命司祭（ハイチ人）がミサ式を行なう。参列者には、この小さな住民部隊のほかにも、『私』をふくむ数人の白人がまじっている。ゲリラ隊には、カトリックも混じっているが、必ずしもそればかりではない。

- (1) The priest was a young man of Philipot's age with the light skin of a *métisse*. He preached a very short sermon on some words of St. Thomas the Apostle: 'Let us go up to Jerusalem and die with him'. He said. 'The Church is in the world, it is part of the suffering in the world, and though Christ condemned the disciple who struck off the ear of the high priest's servant, our hearts go out in sympathy to all who are moved to violence by the suffering of others. *The Church condemns violence, but it condemns indifference more harshly. Violence can be the expression of love, indifference never. One is an imperfection of charity, the other the perfection of egoism. In the days of fear, doubt and confusion, the simplicity and loyalty of one apostle advocated a political solution. He was wrong, but I*

*would rather be wrong with St Thomas than right with the cold and the craven. Let us go up to Jerusalem and die with him'.*

- (2) *Mr Smith shook his head sorrowfully; it was not a sermon which appealed to him. There was in it too much of the acidity of human passion.*

I watched Philipot go up to the altar-rail to receive Communion, followed by most of his little band. *I wondered whether they had confessed their sins of violence to the priest; I doubted whether he had required of them a firm purpose of amendment....* (以下は要旨) ここで、『私』はそばにいたマーサ（南米大使の妻であり、『私』と情事をつづけてきた女）から医者マギオットの暗殺を知らされる。マギオットはハイチの黒人医者であり、ゲリラ隊の活動をひそかに支援してきた人である。しかし、彼は、コムニスト・グループの一員として、彼らとは違った暴力革命の方法を用意していた。『私』は彼の死をきいて、“真に頼れる友人から急に引き離された思いに打たれる。” “彼の死は、『私』たちの軽薄さを責めているようであった。” 夕方、『私』はスミス夫妻と食事をする（ハイチに失望したスミスは、帰国の途上、このドミニカでも、やはり菜食主義センター建設の運動をつづける）……その夜、『私』は、枕もとにマギオットの遺書を見つける。それは、こう書いている。

- (3) その要旨：“ハイチ政府は再びアメリカ政府の援助を受けようとしています。大統領は、いよいよ共産主義信奉者に弾圧を加えるでしょう。これは、世界中どこでもそうです。だが、コムニストはつねに存在するでしょう、ちょうどユダヤ人やカトリック教徒がそうであるように” さらに遺書はつづく “Do you remember that evening when Mrs Smith accused me of being a marxist? *Accused is too strong a word. She is a kind woman who hates injustice. Yet I have grown to dislike the word 'Marxist'.* It is used so often to describe only a particular economic plan. I believe of course

in that economic plan—in certain cases and in certain times, here in Haiti, in Cuba, in Vietnam, in India. *But Communism, my friend, is more than Marxism*, just as Catholicism—remember I was born a Catholic too—is more than the Roman Curia. *There is a mystique as well as a politique*. We are humanists, you and I. You won't admit it perhaps, but you are the son of your mother and you once took that dangerous journey which we all have to take before that end. *Catholics and Communists have committed great crimes, but at least they have not stood aside, like an established society, and been indifferent. I would rather have blood on my hands than water like Pilate...* (途中省略) (上の下線部は作者のもの)

I implore you — a knock on the door may not allow me to finish this sentence, *so take it as the last request of a dying man — if you have abandoned one faith, do not abandon all faith*. There is always an alternative to the faith we lose. *Or is it the same faith under another mask?*"

- (4) ...*I had left involvement behind me, I was certain, in the College of the Visitation: I had dropped it like the roulette-token in the offertory. I had felt myself not merely incapable of love—many are incapable of that, but even of guilt. There were no heights and no abysses in my world — I saw myself on a great plain, walking and walking on the interminable flats. Once I might have taken a different direction, but it was too late now. When I was a boy the Fathers of the Visitation had told me that one test of a belief was this: that a man was ready to die for it. So Doctor Magiot thought too, but for what belief did Jones die?..* (以下夢のエピローグ)

上述のひと続きの引用を仮に四つの部分に分けて考えてみよう。まず、(4)の『私』の問題から取りあげる。この小説全体をつうじて大きな比重を占めるのは『私』の Sex-love についての描写である。「悪」の問題は、若いときから作者グリーンを意識を占領してきた問題だそうだが、彼の本格小説の中にシバシバ出てくる Sex-love, 端的に言えば、情欲のシーンは、ほとんど姦通行為である。これは、リアリストとしてのグリーンが人間存在のありかたを追及するのに、最も手ごたえのある材料であると感じたにちがいない。だが、この小説においてほど、Sex-love の行為が生々しく直接的タッチで描かれたことは曾てなかったのではないか。

さて、『私』は根っからの感覚主義者である。人妻マーサとの関係のはじまりも、“ちょっとの好奇心と、.. ちょっとの欲望” からであった。時がたつにつれて、女体への執着と、しっと心こそ激しくなれ、「愛」そのものは“できそこないの酒のように成熟することがなかった。”『私』のねがいは、たゞ邪魔者が入らず安心して関係がつけられるということをおいてない。だから銃殺の音がこだまする、すぐそばで、『私』は女という“乳と蜜のながれる約束の地”を思ったりする。

I could imagine the taste of milk on her breasts, and the taste of honey between her thighs. ゲリラ隊のテロがあり、またそれに対する政府がわのむごい報復行為があろうと、「我々には関係ないことだ」と二人はベッドの中で言いあう。こんな風にして、“make love”という間接語が、ひんばんに出てくる。Love-making は、『私』にとって最も実質的な生の根幹である。その点、ファウラー (A Quiet American) の心境もこれに似ていた。ヴェトナムの戦場(フランス植民地時代)にあっても、ファウラーは言う、「政治のことなんか、興味ないよ。ぼくはたゞの報道者だ。ぼくは、アンガージュしないんだ」また「勝手に殺し合うがいゝ。こっちも残虐なら、あっちも残虐ではないか。だから、ぼくは巻きこまれたくないんだ」と宣言する。そして原地女との情欲に心を奪われる。その点は同じである。しかし、ファウラーの血は、『私』のよりずっと温かだ。ナバーム爆弾の炎に焼きこがれる住民を思い、ちぎれた子供の死体を抱いて放心する母親を目にしたとき、ニヒリスト・



ファウラーは、戦争を心から憎みはじめる。そして遂に彼も問題に首を突っこんでしまう。この『私』にもハイチの暴政を憎む心はあるが、ファウラーよりも無気力である。"Somewhere I had forgotten how to *be involved* in anything. Somewhere I had lost completely *the capacity to be concerned*."

一方、『私』の官能の遊びには、絶えず暗さと不安がつきまとう。それは、"真に愛することを捨てた"者の負わねばならぬ代償であろう。"多くの人々も、自分と同様、愛することができない"と『私』はつけ加える。『私』を筆頭とするコミディアン達は、けっきょく戯画化された我々世間人のことであろう。偽の愛は他人のために絶望することもなければ、自分のためにも絶望しない。"Desperation and truth are closely akin—the desperate confession can usually be trusted, and just as it is not given to everyone to make a deathbed confession, so the capacity for desperation is granted to very few, and *I was not one of them*."グリーンは絶望の哲学が、こゝにも首を出す。キリスト教が絶望を罪とすることは、無論グリーンは知るところだが、絶望を通過しない楽観は、安手のコミディアン精神にすぎない。だから作者は今まで多くの主人公たちに絶望をくぐらせた。暗殺されたマギオトも、またスミス夫妻も、その意味で、絶望をくぐった人々である。『私』は、このような人々の純粋な光りを身近に見て、ふと自己の虚しさを感じるが、"やり直すにはもうおそすぎる"と思う。

話をもどそう。『私』の Sex-love についてである。この愉悦的なべきものから密かに発散するものはどうであろう。This is one of the pains of illicit love. Even your mistress's most extreme embrace is a proof the more that love doesn't last. この悦楽の暗い自己矛盾性は、"The End of the Affair"の深刻なテーマであったし、"A Quiet American"の中でも不気味な底流をなして最後まで流れていた。"The Heart of the matter"の、あの悲劇的な結末のところで、ある詩の一句（リルケ）がよまれるが、それはグリーン自身の現実観を反響しているようで印象的であった。

We are all falling. This hand's falling too——

All have this falling sickness none withstands....

この凡てが没落していくという「生存の不安定性」は、グリーン文学の暗い土壌をなしているように思われる。この地上の人生を、いつ逃げうせるかわからない“情婦”のように愛する我々にとって、人生が差しだす愉悦の一つ、ひとつが、また“情婦”の甘い抱擁のように不安にみちたものである。生存の不条理性がサルトルやカミュの認識の出発点であるとするなら、劣らずこのことに敏感であったグリーン文学が、ときに実存主義流に見られるのも一理ある。さて、この小説においても、没落の意識は、情事にふける『私』に、絶えず色々な形でしのびよる。たとえばこう云う形で、愛する者の死を追って首をくくった黒人マルセルのぶらぶらする死体を思いだしながら、『私』は考える。

“Neither of us would ever die for love. We would grieve and separate and find another.

またこういう形で、これは夫と子供のいる大使館内で、女と『私』の情事である。She said, ‘Let’s do it. Let’s do it quickly.’ She lay on the edge of the bed and pulled me towards her.... She had drawn up her knees and I was reminded of Doctor Philipot’s body\* under the divingboard: *birth, love and death in their positions closely resemble each other*.... (※かれたプールの中で、足をかぎめて動脈を切ったフィリポットの死体。彼は、反政府のかどで自殺に追いこまれた。)

この一刀彫りの簡潔な筆致は、瞬間『私』のところに開いた虚無感をさむぎむと描いている。(以上、二つ、どちらの場合も、『私』の欲情は一時的だがさめてしまう。そして、二つの場合とも、『私』の Love-making は、いのちを賭して現実にアンガジェした者たちの傍に置れて描写されている) やがて、同じコミディアン種族の一人、ジョーンズの登場をキッカケに、『私』の内部に、しっとの火が点火される。“夫が妻の不貞に、まるっきりのメクラなら、反対に情夫は、いたる処に女の不貞を見る”からだ。徐々に強まっていく「しっと」の火にさいなまれながら、『私』は“舗道に頭を投げる自殺者のように、快楽に身を投げる”。愛をあきらめ、愛のそぶりだけに甘んじて死んだ

母親の欲情するすがたが、何度も『私』の脳裡をかすめる。『私』は朝明の移り変わる色あいを眺めながら思う：——transience is my pigmentation; my roots will never go deep down anywhere to make me a home or make me secure with love. このようにして、ふるさとの非在感、愛の非在感が『私』の食う快樂という食べ物の中に、毒のようにまじりこんでいく。それは、ゆるぎない「生」の岩盤をかゝえこむ「根」の欠如感である。筆者は、サルトルの小説「水いらず」の女の愛の中にも同じ「根」の欠如感をかんじる。肉体以外に愛の根拠を見出さない人間のうつろさである。サルトルの言う「実存に先立つ本質の否定」が必然的に生みだす人間の孤独と不安である。こうして、『私』は、ついに猜疑と憎悪に駆られて、友ジョーンズを死のわなに落し入れる。グリーンを取りあげる、このような Love affair は、けっきょく我々大多数の生存のすがた、そのものを象徴しているのではないか。生存を「情婦」のようにしか愛せない我々の生きかたを。

しかし、一方には、ハイデガーの言う「存在の光りの中に立つという実存」の喜びがある。それは、サルトルによって否定される存在の「本質」の肯定である。そこでは、凡ての者が、みずからの生存の孤独から脱出して、光りの中で「一つ」に出会う。作者グリーンは、むしろこの事を虚妄の悦楽の描写をとおして、裏から語っているのではないか。たとえば、志やぶれて、ハイチを去ったスミスへの『私』の深い憧憬が、このことを表わしている。「祈る必要もないほどに平和の心に澄みきっているスミス氏」『私』は彼を思うと、ちょうど人々のもとに置かれていく「ギデオン聖書のイメージを連想する。」「彼の確信」「彼の目的の純粹さ」『私』は、それをうらやましくさえ思うのである。

真の「愛」は世界の不幸に無関心ではあり得ない。他（ひと）の苦しみを自己に映す一体感は、おのずからアンガー・ジュマンにつながっていく。しかし、『私』は言う。「自分は involvement をとっくの昔に捨ててしまった。自分は多くの人々と同じように愛することができないのだ。... 今となっては、おそすぎる」と。(4)

そして、エピローグがくる。『私』は、すでに死んだジョーンズと共に荒地に横たわっている夢をみる。さく漠たる岩石にかこまれ、かわき疲れはて、死

んでいくジョーンズは、「こゝは結構な処だ」とつぶやく。それは、おもしろ、おかしくの才人ジョーンズ最後の冗談である。すると、『私』は「敵ども (the bastards) を防ぐのにか？」と聞きかえす。「そうじゃないんだ」と返事がくる。「敵ではない。我々のことだ」と言うのであろう。このようにして、自らの才智に崩壊していくジョーンズは、また『私』の分身でもある。これらコメディアン達は、しょせん「親」を知らない寂しい人生の“私生児”でしかありえなかった。



(3)に入る。医者マギオットの遺書である。こゝでは、アンガージュマンの意味が積極的に問われている。(4)の中のコトバ、...one test of a belief was this: that a man was ready to die for it. 医者マギオットは、まさにこのテストを通過した人である。たゞおもしろい事には、カトリック作家と言われるグリーンが、小説のあちこちで、このマルキスト Magiot に高貴なシルエットを与えているということである。黒人マギオットは、カトリック教徒として生れてはいるが、もはやクリスチャンの神を、同胞たちのヴァドゥー教同様に信じていない人なのである。彼の信ずるのはコミュニズムの未来であり、経済の法則である。それにもかゝらず、作者のマギオットへの共感が、上記引用文中に匂っているではないか。たとえば、(1)の亡命カトリック僧の言葉が、それを裏書きしている。‘Violence can be the expression of love, indifference never. One is an imperfection of charity, the other the perfection of egoism...’

筆者は、“The Burnt-Out Case”の中で僧院長が、共に癲患者のために献身する無神論の医者 Colin を暗にさして言ったコトバを思いだす。

“神は、万物の中に存在する。だから、あなたが愛するとき、愛するのは神である。あなたが慈悲深いとき、慈悲深いのは、あなたの内なる神である。しかし、憎しみやしっとは神ではない。善のみが神の造りたもうた凡てである。悪は、神の在るべきところに神が無いということである。...たとえ、神を信じてなくても、慈悲深い人は、神を表わしているのであるから、その人は、その慈悲の程度に応じてキリスト教徒である”。マルキスト Magiot も、その

意味で、“潜在的クリスチャン”なのである。事実、このことを、作者はマギオット自身に言わせている。わずかなコトバであるが、深いふくみを持った言葉というべきである。すなはち、*There is a mystique as well as a politique* を中心とする前後のコトバである。もし私的な権力欲によごされない純粋なマルキストがいるとするなら、たとえ彼が意識的には唯物論者であり、人間の唯物的メカニズムのみを主張していても、彼が、隣人の不幸をいたみ、そのために自己を捧げるならば、彼はすでに愛の人である。唯物論的マルキシズムでは不可解な「愛」の価値感に動かされて、彼は生きているのである。生命を放棄するのは、彼が、ステに自己存在の唯物論的拠りどころである肉体さえも超越する「何ものか」に突き動かされているからである。この実感は、モハヤ単なる経済学的法則のかなたにある。*‘There is a mystique as well as a politique.* とは、この事を告白したマギオットの心情であろう。それは、マルキシズムを見えないところから支えている“神秘的な”倫理精神である。（この事を究明して、マルキシズムにカントを導入したマルクス学者ベルンシュタインがいる [S. Hook : マルクスとマルクス主義者たち]。また米国のマルキスト H. セルサムは、その著書「社会主義と倫理」の中で、“Leaves of Grass” から個人と万人との愛の一致体験に関する詩句を引用して、ホイットマンの思想にマルキシズムの精神を見ると述べて、全面的共感を示している。しかもそのホイットマンが形而上的な神秘詩人であることは実に興味ふかい）

話を返そう。作者は、“死は誠実の証明である”と他の箇所でも『私』に言わせている。疑いもなく、マギオットは、死をもって自己の誠実を証した一人である。“まるでローマの元老院議員のように、ふしぎな威厳にみちて、しかも温厚そのものである” 黒人マギオット。彼は、“ハイチに生きて、ハイチの現実にこんなにも無関心な『私』を悲しいと思う。

さて、ここで、再び、グリーン文学の新しい展開点として気づくことを二・三要約しておこう。従来においても、グリーンの目は殆どつねに、“生存に先立つ人間の本质”としての「愛の実存」とも言うべきものに向けられてきたのであるが、只それは大いに対 個人的意識の領域内で具象化されてきた。政治

は、とうてい人間の根源苦に触れることができない。触れると思っている政治家がいるなら、“彼はイルージョンを食って生きている”のだ。グリーンは人間の救いを政治とは全くちがった次元において視つめてきた。このことは、前論文で詳述したとおりである。政治の問題がからんでいる“A Quiet American”でさえ、ファウラーの戦争行為への憎悪と、ついでそれへの悲痛なアンガージュマンは、やはり個人の領域を出なかった。（この半政治的アンガージュマンが、何かふっ切れぬグリーン的陰影を曳きずっていることについては、後で述べたい）

それが、今度はスッパリ政治的なアンガージュマンを取りあげているのである。しかも、それがマルキストの「アンガージュマン」でもあり、かつそれが重要な内的価値を与えられていることは前述のとおりである。メキシコでの宗教迫害を取材した“The Power and the Glory”の中で、殺す無神論的革命家と、殺される神父とが、この小説では調和・共存のすがたを見せているのはおもしろい。というより、両者に相通ずる一すじの倫理的気脈を正面から取りあげたのであろう。“人が他のために苦しむとき、彼は、キリスト教的神秘の一端に触れて、人間の条件を知りはじめる。私は苦しむ。それ故に私は存在する。”これは、“The Comedians”のすぐ手前の作品“The Burnt-Out Case”，ケリーのコトバである。あのケリーの内心の声が、この作品では、一そう大きな社会的スケールをもって、こだましている。政治は、人間の「根元」を左右することは出来ないが、「根元」は政治に無関心であることができない。無関心は、自らの愛の本性に反するからである。こうして、“手を血ぬらすことも辞さない”マルキスト Magiot の像にも、作者は高貴なくまどりと与えた。確かに、この事には間違いない。しかし、これだけであろうか。政治的にアンガージュした後のファウラーの、あの割りきれぬモヤモヤが、此処では、すっかり晴れわたって、何が何でものアンガージュマンだけが謳われているのだろうか。筆者にはそう思えない。グリーンにしては珍らしく明快そうなこの作品もけっきょく屈折した意味のひだを隠していると思われるフシが大いにあるのである。この事も彼の新しい展開点として取りあげずにはおれない。すなわち、Violence の問題である。引用の繰り返しはなるべく避けたい。(1)と(3)を読

んでいたぶきたい。確かに、司祭のコトバや **Magiot** の遺書には、社会革命のための暴力行為（殺すこと）は、善意のアンガージュマンから結果するものとして肯定されている。作者の描くハイチの政治と社会は、それほどに悪く、みじめなのである。しかし、これは全面肯定であろうか。然りとも否とも言えない微妙なものが感得されないだろうか。あるいは、然りであり否である。あの、グリーンが多義性のあいまいさが此処にもものぞいているようだ。この事について考えてみたい。

まず、(1)では司祭は“社会悪に無関心”であることをエゴイズムの100%顕現として厳しく責めながらも、暴力を決して全面肯定していないことが、ハッキリ分る。しかし、現実問題として、彼は、やはり暴力を必要悪として認めざるをえない。その点ではマルキスト **Magiot** と同じである。ここまででは既に論じた。問題はその後である。端的に言えば、作者はアンガージュマンについて、もう一つのあり方を暗示しているのではなかろうか。その匂いは、引用文(1)と(2)に関するかぎり、三つの個所からやってくる。(一) 司祭の暴力肯定のコトバは、あくまで彼自身の見解であって、キリスト者の理想は別である。その事は、彼自身も明らかに知っているということ。(二) スミス氏が、司祭の見解に悲しげに首を振っている。(三) 『私』は、司祭の告解で、暴力の罪が問題とされたか、どうかを可成り気にしているということ。

以上三点で、最も強く心にとまるのは、スミス氏の悲しげな（否定の）そぶりである。筆者は、ここに作者グリーン自身の悲しいそぶりを見る思いがするのである。このさりげない描写が与える印象のつよさについて、以下、小説全体から論拠をさぐってみたいと思う。（以下第二部に続く）

（昭和42年9月29日受理）